

ブレイブリーゼロ

山岳さん

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

かつて数多の平行世界を渡り、その全てを救った四人の英雄「光の戦士」。その一人である少女イデアは仲間たちとの日々を忘れられず空虚な日々を送っていた。

ある日彼女が練兵所ですごいもののように鍛練をしていると、突然光の円環が現れて…

作者は重度のブレイブリー厨です。この度ブレイブリーセカンドの発売を記念して書きました。故に前作ブレイブリーデフォルトの内容を知らぬ人はネタバレに注意して読んでください。

(感想、意見等は歓迎です)

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	序
36	27	17	11	1

序

かつて世界は神界により管理されていた。

しかし、数億の時を経て人間という種が地上に誕生すると、神々は世界の手をその人間に委ねた。

同士を慈しみ、自然を愛す彼らこそ、調停と平和を司る「運命の紡ぎ手」に相応しいと神は判断したので。

だが、人間という生き物は総じて脆弱である。

爪を牙も持たず、下級の獣にすら力で遙かに劣る。

拳げ句、神が創りしは魔魅が跳梁し、魔獣が跋扈する世界。

人が知恵と剣で生き抜くには余りに酷烈で、残酷な世界である。

結果、神の願いに反し、世は混沌と闇に吞まれた。

神は嘆いた。こんなハズではなかった。どうして人間などに望みを託したのか、と。

その時、世界を守護せし一人の天使が創造の神に語りかけた。

「人は確かに弱い。しかし、彼らは時としてあなたたち神をも凌ぐ力を発揮する」と。

「その力とは何か」、神は天使に問うた。

天使は言った。それは「心」だと。

神は嘲笑った。何を馬鹿な、そのように不確かなものが我々を越えるものか。

天使は満面の笑みを浮かべ言った。

「では私が証明してみせます」

天使は下界へ下り、人間たちの心の声を聞き続けた。そして何千、何万もの人間の祈りを通じ、ついに心の声を結晶化させるに至った。

その結晶こそが即ち「クリスタル」。天地を構成せし四つの元素、火、水、土、風から成る奇蹟の石である。

そして最後に天使は人間へクリスタルを生かし創られた、奇蹟の具現「魔法」を授けた。

そして人々は火を操り、水を生み出し、風を司り、地を動かすようになった。

人間は歓喜し、天使を崇めた。

私たちはあなたを崇拝すると。

しかし、これを快く思わぬ者がいた。

神である。

彼にしてみれば被創造物である人間が、同じく被創造物である天使に敬愛を捧げるなど許容できるわけがない。

神は激怒し、天使を神界に幽閉してしまった。そして彼女を二度と人間の前に姿を現せぬようにしたのだ。

人間は大いに嘆き、そして誓った。

天使が創りしこの「クリスタル」を必ず守護してみせると。

そして人間は最初に魔法を操りし者を「光の戦士」と呼び、そしてその者を、クリスタルを保護せし聖なる教団、クリスタル教の初代教皇に任命した。

全てはクリスタルを護るために。

そして天使が愛したこの世界に真の平和をもたらすために。
運命の中で今日も人間は抗うのだ。

クリスタル正教、教本「クリスタルと天使」第一節より

著：クリスタル正教 枢機卿レスタール

影と光の大地「ルクセンダルク」

その西大陸の北に位置する大国、「エタルニア公国」

過去の地殻隆起の影響により、国土の大半を長大な山々で埋め尽くされたこの国。万年雪の檻に閉ざされた北東の僻地はかつてクリスタル正教の正教会が置かれた地であつた。

冬は北海より吹き荒ぶ寒風により極寒と化すが、季節が春に移ると多少寒さは和らぎ、南より多数の商人と旅人が訪れ、市場と城下の街々は喧騒と活気に包まれる。

さて、この国に唯一存在する街より北方へ目を向けると、一つの要塞がその姿を見せる。土のクリスタルが安置された「不死の塔」に頭を並べるほど巨大かつ壮大に聳え立つそれは、まさしく堅忍不拔の名に相応しい偉容を誇り、この国に住まう民たちに絶

その切っ先は音の鎖を軽々と突き放し、さながら光の一部となって目標の的を穿ち、粉々に破壊した。そして風が刃と化して練兵所を駆け巡る。

神速の刺撃、彼女が得意とする剣型の一つがその真価を發揮したのだ。

目標の破裂音に次いで辺りに砂塵が舞い、練兵所を包みこんだ。

二分後、砂も落ち着き、漸くイデアの金沙も剣風より解放される。

流石は光の戦士、齡16にして彼女の剣技は達人の域に達しており、また剣撃に至っては竜種（ドラゴン）すら一撃で討滅しうる程の威力を有していた。

その証左に彼女の前方十数メートルには細長く地面が削れた跡があつた。無駄な破壊など一切なく、ただ真つ直ぐ剣創は練兵所の強固な外壁を撃ち削り、外にまで続いていった。

まさしく絶技。公国史上最強と称される「剣聖」や「聖騎士」もここまでの剣撃は放てまい。

さぞや満足のいく結果であろう。

しかし、少女の顔は一向にして晴れない。それどころか溜め息すらつくと、イデアは剣を腰の鞘に戻し、悄然とした面持ちのままその場に立ち尽くした。

強力な剣撃も、数多のジョブも、今彼女の抱える難敵を前にしては塵当りだった。

「ダイズ、アニエス……」

弱々しい口調でかつての仲間の名を口にしながら、彼女はあの激動の日々に思いを馳せた。

神界の侵略を企み数多の世界を滅ぼした災厄の破壊神ウロボロス。その野望は四人の光の戦士の絆と力、そして天使の願いを継いだ吸血鬼と大魔導師の想いの前に潰えた。

闇のオーロラは消え、大穴も閉じ、世界とクリスタルに安寧が訪れ、数多の平行世界を巡る四人の冒険譚は幕を閉じた。

：ハズであった。

しかし、物語は必ずしも幸せの内に終わるのではない。

その後イデア・リーを除き、他の戦士たちにはある運命が待ち受けていたのだ。

ある者は腐敗した教団を復興すべく風の巫女の役職を全うし、またある者は弟の眠

る墓標の前で昏睡しているところを発見され、

そして……またある者はその姿を消した。

残された彼女はこの現実を受け入れられずにいた。

風の巫女はまだいい。会おうと思えばいつでも会えるだろう。教団が例えそれを邪魔しても、公国軍元帥閣下の娘という威名と、公国軍近衛騎士団次期団長の身分を活用すればさして難しいことでもない。

だが、あとの二人は別である。

昏睡した少年はあの後公国内の治療施設に収容され、土のクリスタルを用いた治療法を公国の医療チームから施されていた。命に別状はないと彼女は聞いているが、目覚める気配もない、と彼の治療に携わった医師たちは口々に語るのだ。

如何に彼女が優れた戦士であろうとも、いくら仲間の巫女が白魔法を熟知していても、原因不明の病は治せない。

彼女としては何も出来ない自分に歯噛みしつつ、鍛練と練兵に明け暮れ、無毛な時を空費するしか道がないのだ。

そして……

「なんであんたがいないのよ……」

かつて記憶を無くしていたギザな男。

女好きでマヌケで甲斐性なしで、だけど誰よりも優しく誰よりも自分を思ってくれたあいつ。

世界を渡ってまで自分たちを救おうとした大馬鹿者。

「リングアベル……」

好きだ、と微笑んだ愛すべき者。

優しく抱き締めてくれたあの腕はもうどこにもない。

明るく励ましてくれたあの暖かさは何処へ消え失せた。

「会いたいよ……」

剣の道に足を踏み入れた時、師に交わした「泣かず」の誓い。

それを破りイデアは嗚咽を漏らした。

目より溢れる大粒の涙。けれどそれを拭ってくれる最愛の人は何処にもいない。

その時だった。

「…………えっ?」

突然大きな光りの輪が彼女の周りに現れ、何層にも連なり練兵所を呑み込んだのだ。その輝きは白の大魔術「ホーリー」すらも凌ぎ、イデアの視界を白一色に染め上げていった。

「何?! なんなの、何が起こるの!!?」

彼女の驚嘆を余所に、光は徐々に縮小しイデアに迫った。

「えっ? ええええええええええ!!!」

刹那、伸縮した円環は大きな扉と化しイデアの体を吸い込んだ。その後、扉は消えその場には静寂と剣創の刻まれた練兵所のみが残った。

その日、誰も知らぬ内に一人の少女が再び世界を渡ることになった。

第2話

「次！ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！前へ」

「はい」

大きく息を吸い込み、吐く。

ルイズと呼ばれた桃色髪の少女は自分に強く言い聞かせながら魔法陣の前へ歩み寄った。

今日は使い魔召喚の日。己の手足となる召し使いを、また愛すべき半身を選定し、召喚する日なのだ。

トリストイン魔法学園では第二学年初回の授業にてこの使い魔召喚をおこなっている。そして使い魔を召喚できなかつた者は落第者の烙印を押され、もう一度一年生からやり直さなくてはならないのだ。

魔法とは本来、ある特定の血筋を持つ者ならば、（程度、技術の高低こそあろうが）基本誰にでも扱えるものである。使い魔召喚も系統は違うが、厳密に言えば魔法に分類されるため、一年間で一般的な魔法学を学び終えた生徒たちにすれば、単なる基本魔法の一つにすぎない。

故に生徒たちは、儀式の成否ではなく、如何に強い使い魔を呼び出せるかに力を尽くすのだ。魔法使いにとつて魔法など発動させて当然。もし魔法使いを謳うも魔法を使えぬ者がいるとするならば、その者の預かり知らぬ所で、血筋に大いな偽装があることだろう。……ただ一人を除いて。

「おい、ルイズ！ あんま魔力を込めないでくれよ？ お前の爆発に驚いて相棒が腰を抜かしたらどうしてくれんだ？」

下卑た野次と冷やややかな嘲笑が彼女の周りから沸き起こる。

そうルイズは聖なる血筋——トリスティン王国ヴァリエール公爵家に連なる者でありながら、魔法が一切使えないのだ。

公爵とは則ち王家の血を引く者であり、王族さえ除けば、最も王座に近い貴族であるといえよう。

魔法の才幹とは血筋に起因するもの。しかし、ルイズのみ例外である。

どの系統の魔法も、魔力を収束させた時点で即座に爆発、衝撃と爆音を発しながら霧散するのみ。属性の影響を受けぬ筈の基本魔法も何故か同様の有り様。

つまるところ、彼女はこの魔法世界ハルケギニアの常識から逸脱した存在なのだ。

貴族でありながら魔法を行使出来ぬ者。

「ゼロのルイズ」

いつしか彼女は学園でそう呼ばれるようになった。

(でも今回こそ!!)

周囲の冷笑を余所に、ルイズは内心熱く燃えていた。

今まではまともに魔法を扱えず散々な目にあつた。

ある時は馬鹿にされ、またある時は自身が貶めた家名を惜しみ涙したこともあつた。

だが、今日は違う。もう馬鹿にされてなるものか。

桃色の長髪を仇敵の少女の髪色と同じくし、ルイズは高らかに呪文を唱えた。

「我が神聖なる僕よ！雄大なる運命を担いし紡ぎ手よ！我が願いと始祖の名の下、御前に姿を現せ!!」

……私の美しき使い魔！出てきなさい！」

瞬間、凄まじい爆風が魔法陣を駆け抜け、ルイズの矮躯を宙へ浮かした。

「へっ？えっ？どどどどどうなってるの!？」

「ミス・ヴァリエール！落ち着いて下さい！」

使い魔召喚の立ち会い人であるコルベール教諭もこの事態には驚き、しかし極めて冷静に対応した。

魔法陣から溢れた出した爆風は、魔力の奔流によるものだと瞬時に見破ったからで

ある。

コルベールは杖を振るい、ルイズの魔力に干渉を試みた。

「大丈夫かしら、ヴァリエールの奴…」

宙に浮かび慌てふためく級友（仇友？）を遠目に見やり、紅髪の美女キュルケは心配そうに表情を崩した。普段は国や家同士の確執による対立しているが、キュルケ自身、ルイズのことを友として認めているのだ。

「問題ない、魔力自体は落ち着いている。後は本人次第」

キュルケの隣で本を読んでいた蒼髪の少女タバサも、ルイズの異変に興味を持ったのか、頁を捲る手を止め、事態の成り行きをじっと観察していた。

「あら、他人の召喚儀式に関心を示すなんて、あなたにしては珍しいわね」

「別に、どんな使い魔が現れるか気になるだけ」

キュルケは火の精霊にして大蜥蜴のサラマンダー。

タバサは絶滅種の風韻竜。

既に相棒を持ちし彼女らは、儀式の行く末を複雑な感情で見守っていた。

(間違いないわ！使い魔召喚は成功よ！)

次第に衰えてゆく魔力の風圧に身を委ねながら、ルイズは恍乎とした笑みを浮かべた。魔法の落伍者たる自分にこれほどの魔力が宿っていたことには驚愕を禁じ得ないが、その衝動も魔法陣に迫り来る強大な気配に比ぶれば些細なもの。

風が完全に吹き止み、砂塵の幕が辺りを覆い尽くす頃、遂に魔法陣が妖しい光を放った。

(来るわ！強くて可憐な私の使い魔が！)

緊張と期待が絶頂を迎えた時、砂の幕が上がり、呼び出されたものの正体が明かされる。

そして

「…えっ?」

ルイズと召喚に立ち会った者たちは一様に顔を固くした。

呼び出されたのは、竜や蜥蜴、はたまた土竜や蛙でもない。

騎士、純白の鎧と燦然たる剣にて体を固めた騎士がそこには立っていた。

「むぐぐう、いきなり何なのよもう」

彼女は不満げに体を頭をさすると、辺りを見渡し表情を皆と同じにした。

そして苦笑を浮かべて、控え目な声で一言

「え〜と〜？あんなたち誰？此処は何処？」

後に「聖騎士と虚無伝説」という名でハルケギニア史に語り継がれる少女二人。

騎士と虚無の邂逅は、トリスティン魔法学園使い魔の儀、その最中に交わされたものであった。

第3話

広場に深い沈黙が降りた。

落ちこぼれた少女が思わぬ才幹を見せつけ、召喚した使い魔は、なんと人間。

しかもその者は召喚者ときして年の変わらぬ少女だったのだ。見慣れぬ鎧と剣を身に帯びているが、金沙のような髪と透き通る碧眼は年端のいかぬ女のそれ。

何処ぞに仕える騎士だと一目で分かるが、なんとも珍妙な騎士がいたものである。

「あゝ、えつゝと」

驚愕したのは学園の者たちだが、困惑したのは呼び出された少女である。

騎士の少女――イデアは自分の置かれた状況を呑み込めずにいた。

悲哀と孤独に苛まれ、練兵所にて自身の無力を嘆いていると、突然現れた光の円環に吸い込まれ、此処にたどり着いていたのだ。

これを理解しろというほうが無理がある。

故にイデアは自分の正面に立ちすくむ桃色髪の少女に尋ねることにしたのだが。

「……」

見事に固まっている。

どうやら事態を理解できぬのは自分だけではないらしい。

一瞬安堵した彼女であつたが、次の瞬間それが起きた。

『プツ！アハハハハハハハハ!!』

地を割るような豪笑が彼女らの左右前後より沸き上がったのである。それは他者の失敗を嘲笑うかのような、明確な悪意に満ちていた。

「見ろよ！ルイズの奴、人間を呼び出しやがつたぜ！」

「しかもよく見りゃ異人じゃねーか!？」

「おいおいルイズ！いくら使い魔を呼べないからって異国の騎士を雇うのはどうかと思うぞ！」

ゲラゲラと下卑た笑いがルイズの頬を叩いた。

この上なく惨めだった。ルイズは泣きたくなるのを必死にこらえコルベールに願ひ出た。

「ミスタ・コルベール！どうかもう一度儀式をやり直させて下さい！何かの間違いです！人間、しかも女の子の使い魔にするなんて！」

コルベールは日に映えた頭をさすり、難しい顔をした。

「残念ですがミス・ヴァリエール、それは出来ないのです。使い魔儀式とは神聖で侵

し難いもの。如何に目当ての使い魔を呼べなかったとはいえ契約が成立してしまった以上、やり直しはあり得ません」

「ミスター！」

「何度言われてもこの結論は決して覆りません。

……さあ、早く本契約の方へ」

「うう、こんなことになるなんて……」

強気な柳眉を下げ、ルイズは項垂れた。

そしてルイズの悲憤は、新たに契約を結ぶ少女へと向けられたのだ。

「あんたさえ、来なければ……」

安堵しているうちに状況が二転三転し、頭を抱えていたアイデアであったが、ルイズの言葉に向かっ腹を立てたのか、碧眼を細めてルイズに食ってかかった。

「さつきから聞いていれば使い魔だの、儀式だの訳がわからないよ！ 此処が何処で、あんたたちが誰なのかちゃんと説明してよね！」

その言葉が鬱積したルイズの感情を爆発させた。

「黙りなさい！ 貴族に向かって騎士風情がなんて物言いなもの！」

そもそも私だって、あんたみたいな女召喚したくなかったわよ！ だけどね、今回の儀式は私の昇級がかかっているの！ 魔法も全く使えない、挙げ句留年しただなんて、どう

やって家族に言えばいいのよ！ちい姉様だって私の学園での晴れ姿を楽しみにしていらつしやつたのに……」

「そんなこと私の知ったことじゃないよ！」

「煩い煩い!!!」

「むぐぐ……」

「ぎゅぎゅぎゅ……」

まさしく売り言葉に買い言葉。金沙と桃色の少女は各々の不満、嘆き、怒りを全面に押し出し、互いに罵りあつた。

「桃頭！」

「騎士（笑）！」

「むきー!!貧乳！」

「い、いい言つたわね!!あんたも貧乳じゃない！」

「煩い！私にはまだ可能性があるの！このコボルトの涎！」

「じゃあ、あんたはオークの尻ね！下品なあんたには誂え向きよ!!」

「むぐぐ……」

「ぎゅぎゅぎゅ……」

「あのミス・ヴァリエールにミス……？」

コルベールが仲裁に入ろうとしたが、金沙の少女の名を知らぬため、介入出来ずにいた。

イデアは、ふとルイズとの口論を止めると、コルベールに名乗りを上げた。

「イデアよ、イデア・リー」

「ではミス・リーと……姓を持つておられるということは、ひよつとして貴族の方ですかな？」

この時ばかりは、コルベールを始め、ルイズ、生徒たちの顔が蒼白となった。異国の、ましてや貴族階級の者を使い魔として呼び寄せてしまったのである。この騎士の少女がどの国出身であるかは定かではないが、どこであろうと大きな問題になるだろう。最悪、外交問題となり戦争にまで発展しかねない。

だがルイズたちの心配は杞憂となった。

「貴族がどんな役職かは知らないけど、私は違うかな。」

ただの一騎士に過ぎないよ」

一騎士といつてもエタルニア公国軍きつての精鋭部隊、近衛騎士団の次期団長候補なのだが、それは言わないでおいた。あくまで候補に過ぎず、また胸を張れるような武勲も持ち合わせていないのだ。

イデアの数多い美点の一つは、偉業を成し遂げてなお驕らぬ。増長とは無縁の性格

にあるのだろうか。

「なんだ、つことは平民か」

「驚かせやがって」

生徒たちは、イデアに対する侮蔑と嫌悪を露にした。

この国、いやこの世界ハルケギニアでは、平民は貴族より服従を強いられている。始祖ブリミルの誕生より始まった魔法至上主義、そしてその負の側面を最も強く体現する国こそが此処トリステイン王国であり、イデアもその身がトリステインにある限り傲慢な貴族たちの支配から逃れられぬのだ。

だが、彼女はイデア・リー。

誇り高き聖騎士ブレイブ・リーの娘にして、最強の剣聖カミイズミの愛弟子。

生憎、このような環境で挫折する程か弱く作られてはいない。

「ふーん？ 貴族とか平民とかよく分からないけど、随分陰気な所だね。私は好きじゃないな」

良くも悪く純粋なこの少女は思ったことをそのまま口に出す。本音と建前の駆け引きなどイデアにとって、モンクが持つ剣の如く無用なものであった。

「…何だと」

幸か不幸か、イデアの声は広場にハッキリと響いた。

彼女の言は、権力を鼻にかけ自尊心に溺れた貴族たちの逆鱗に触れるものであった。

先ほどまで広場を覆っていた冷笑はいつしか消え、剣呑な雰囲気は漂い始めていた。

「んん!!あー、ミス・ヴァリエール、そろそろ本契約の方へ」

「…はい」

空気の变化を感じとったコルベールは話の主軸を変え、本契約をルイズへ促した。ルイズは貴族の権威を無視したアイデアの発言に顔をしかめつつ渋々彼女の下へ近づいていった。

「今度は一体何?」

「あんたはもう黙ってなさい」

契約、という言葉に難色を示すアイデアを押し退け、ルイズは杖を高々と掲げ契約の呪を口にした。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。」

「この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

杖を軽く振り、ルイズはアイデアに寄り掛かるとその柔らかかそうな唇をアイデアの唇に

重ねた。

一瞬の交差の後、二人の体が離れる。

「えっ?」

アイデアの思考は再び混乱の淵に落とされた。

ルイズは恥ずかしそうに赤面し、アイデアに背を向ける。

途端アイデアの左手に焼き付くような痛みが生じた。

「ぐう!?!」

火の魔法とは違った、体の内側を焦がすような激痛にアイデアは思わず膝を付け、そのまま広場の土畳の上に倒れ伏した。

コルベールはアイデアの左手の甲に注視して、現れた紋章を素早く手帳に書き記した。

「ふむ、見たことない紋章だな…」

ああ、皆さんこれで使い魔の儀を終了とします。各自寮に戻って下さい」

コルベールがそう言うのと、生徒たちは制服の懐から杖を取り出し、「フライ」の呪文と共に浮遊し、学園へと帰ってゆく。

「ルイズはその下賤な騎士様と一緒に歩いて帰れよ!」

口々にそう嘲り、傲慢な貴族たちは宙を駆る。

ルイズは羞恥と屈辱に肩を震わせ、未だ地より起きぬ使い魔へ怒声を飛ばした。

「あんたはいつまで寝てんの！ さっさと起きなさい！ 帰ったら貴族がなんたるかをたっぷり教えてあげるわ!!」

しかし。イデアは黙ったまま仰向けに空を見上げている。

ルイズが痺れを切らし歩み寄ろうとした時、イデアは半身を起こして金沙の髪を頼りなく揺らした。

「ねえ、ルイズって言ったっけ」

「気安く呼び捨てにしないで」

「月って空にいくつ浮かんでるのかな」

そして、およそ彼女らしくない、か細い声で質問した。その声には何処か継るような、か弱さが含まれていた。

ルイズは質問の意図を理解せぬまま、当然のように答えた。

「? 何言ってるの? 月は二つに決まってるじゃない」

「っ!! そう…」

イデアは立ち上り、哀しみを孕んだ表情で言った。

「私…帰るね」

「あんた、何言つて…待ちなさい!!」

ルイズが言い終わらぬ内に、イデアは学園とは反対の方角へ駆け出した。

ルイズはイデアの突然の行動に啞然とし、止めようと試みたが、その時にはイデアの姿は何処にもなかった。

第4話

『僕はティズ、ティズ・オーリア！これからよろしくね！』

『公国軍の手先だったあなたに、私の何が分かるんですか!!?』

『そうまさしく愛』『リングアベルは黙って』…』

『君は、そう「希望」。僕の希望だ』

『愛してる、イデア』

「……………夢か……………いつの間にか、寝ちやつてたんだ…」

頼りなく風に揺れる焚き火に手をかざし、イデアは深く溜め息をついた。寒さは然程でもないが、こうしていると不思議と落ち着き、心が安寧を得る。仲間と夜営した際、よく不安を抱えては、こうして火の前に座睡したものだ。

逃げ入った森は既に闇に包まれ、彼女の頭上には黒々とした夜の帳が広がっている。星がイデアの髪と同じ光を放っている。

そして……その星々の中心には蒼月が二つ。イデアの故郷エタルニア、いやルクセンダルクでは決して有り得ない情景が、彼女の視界に映りこんでいた。

「この状況が夢であつてほしかったな……」

使い魔の儀の最中天を仰ぎ、見つけた二つの月影。燦々たる太陽の幕に阻まれハツキ

りと視認できなかったが、確かに月は二つあった。

そして時が過ぎ、この世界が夜を迎えるとアイデアの予想が確信へと変じたのだ。

「ここはルクセンダルクじゃない…完全な異世界なんだ…」

平行世界ならば何度も渡ってきた。仲間たちと奮闘し幾度となくクリスタルを解放した。そして…自分を含め平行世界の仲間たちが辿る悲しい運命を全て知った。

世界は違えどあそこは紛れもなくルクセンダルクだった。世界は異なろうとアイデアの愛した人たちが確かに存在したのだ。

だが、ここは異世界。アイデアが愛した人や国は何処にもない。それどころかアイデアを賤民と断じ、その様を見て嘲笑する傲慢な輩が幅をきかせている場所。

そんな所にいきなり呼び出された挙げ句、ろくに説明もされぬまま「使い魔」とやらの契約を受け、あのいけすかない桃頭に従属を強いられる羽目となった。あの燃えるような痛みも契約が結ばれた結果生じたものなのだろうか。

そしてこの左手の紋章こそ…

「使い魔の証…」

アイデアは証をじっと見つめた後、何を思ったか腰の佩剣を抜き、その剣身を左手の甲を押し付けた。

そして、それを一気に引いた。

「ツくー」

鋭い痛みが体を駆け抜け、次いで左手が生温い感触に満ちた。

交戦時ならば痛みも出血の感覚も気にならぬのに、自傷行為はどうも堪える。

鮮血と焚火が重なり、森にはあるまじき赤が生まれた。

イデアは再び左手の甲を見た。血に汚れていたが、不思議な紋章は依然として刻まれていた。

「はは…騎士の剣で自分を傷付けたなんてお父様が知れば、大目玉くらっっちゃうな…」
頼りない自嘲の笑みが込み上げる。

幼いながらも整った顔立ちが翳り、イデアは暗澹たるものを感じた。

使い魔の証を消せず、ルクセンダルクに帰る方法も此処が何処かも分からない。

正しく八方塞がり。

弱味を見せまいと、気丈に振る舞っていたイデアの精神は限界に達しようとしていた。

「いつそ…」

——命を断ってしまえば…夢が覚め、帰れるかもしれない

自傷ではなく自殺。イデアは濁った眼のまま再び柄に手を掛けた。

その時だった。

「つくー！また?!」

勢いの乏しい焚火の上に、突如光の円環が現れた。

円環はアイデアをこの世界に送った時のように、大きく渦巻き縮小し、再びアイデアを呑まんと迫った。

アイデアは立ち上がり、鮮血に染まった左手を伸ばし光の環を掴んだ。

—— やっぱり、間違ってたなかつた。

—— これは夢なんだ!!

これでルクセンダルクへ帰れるかもしれない。

安堵と憔悴の入り交じった笑みを浮かべ、アイデアの体は円環へと消えていった。

「……うん」

混濁する意識の中、イデアの視界が捉えたものは無であつた。色彩など存在せず、およそ人の世から剥離した無想の景色。無限に繋がる無の空間を前に、イデアは何故か既視感を覚えた。

とある激戦の中、そんなに遠くない記憶。

—— そうだ確か前の世界で、正体を露にしたエアリーに敗れた時に：

「目が覚めましたか……？」

「！」

頭に響いた美しい声音に、イデアの意識は一気に覚醒した。

宙に浮遊する感覚を体に馴染ませ、ゆっくりと頭を起こし、声の発生源を見る。

そこには：

「ア、アニエス……なの？」

腰まで伸びる薄茶色の髪に、イデアに劣らず整った面貌。

体に纏いし祈禱服は、見る者を圧倒する清冽さを醸している。

かつて共にルクセンダルクの大陸を巡り歩いた仲間。

クリスタル解放の宿命に燃える風の巫女。

クリスタル正教次期教皇との呼び声高き才女。

光の戦士の一人、アニエス・オブリージュがそこに佇んでいた。

何故ここにいるのか、此処はどこなのか、あの光の円環はアニエスの仕業だったのか。尋ねたいことは多々あるが、イデアは驚愕のあまり言葉を発することが出来なかった。

だが、イデアの第一の問に対し正面の少女は解を投じた。

「いいえ、私はアニエス・オブリージュではありません。容貌こそ同じですが、私は彼女とは別人です」

「アニエスじゃない…?」

「どういふことなのか?」

目の前の少女は姿形だけではなく声音までアニエスと一致している。決して短くない期間を彼女と共に過ごしたイデアだからこそ、少女の言葉を疑うのは必然であった。

懐疑的なイデアの視線を浴びて、アニエスと思わしき少女は苦笑した。

「貴女は知っている筈ですよ…アニエス・オブリージュと全く同じ姿を持つ者の存在を」

「アニエスと同じ…あつ!」

イデアの頭に一つの絵画が浮かび上がった。

祖国エタルニアの北西に建つ、氷の古塔。その最上階の玉座の裏にそれは眠っていたのだ。

「天使の絵」

1800年前、大戦の最中にあつたルクセンダルクに突如として舞い降りた片翼の天使を描いたもの。その絵に描かれた天使もアニスと同じ容貌を持っていた。

それを拝見するため光の戦士たちは、絵画の所有者であり、またその製作者である吸血鬼と一戦を交えたのだ。

そして吸血鬼の口から語られた、教団とクリスタルにまつわる真実…。

イデアが懐かしむように頭に情景を思い描くと、少女は艶然と微笑んだ。

「その様子だとレスター卿から全てを聞きましたね」

吸血鬼の名を知る少女を見て、イデアは確信した。

「レスター卿を知っている、やはりあなたは…」

「ええ、私は……1800年前レスター卿とユルヤナの老師の前に現れた天使です」

第5話

「私は1800年前、レスター卿とユルヤナの老師の前に現れた天使です」

彼女はそう言うのと背中より片翼を展開した。

それは物語に登場し、誰もが夢想するような、純白に映えた美しい翼だった。

しかし、いやそれ故に、翼に刻まれた無数の疵痕が妙に痛々しく、イデアは本来神聖であるはずのそれを直視出来なかった。

「翼の疵に関して、詳しいことは私の口から語ることは出来ませんが……」

心苦しうに語る天使の手前、無理に聞き出すことはできない。最初からそんな気な
ど微塵もないが、これにより彼女が絵画の天使である信憑性が大幅に増したといつても
よい。

何しろ、彼の天使は助かる見込みもない傷を負った状態で二人の前に現れたというの
だから。

そのことに関し、イデアには一つ疑問があった。

「……ねえ天使様、あなたって死んだんじゃないやなかったっけ？」

老師とレスター卿曰く、天使は未来に起こるであろう三つの災厄を予言し、二人の前

で息を引き取ったという。

二人の言を疑うつもりはないが、こうして天使を名乗る者が現れた以上、天使の生死の件については再考の余地がある。

そうした意図を込めたアイデアの疑問だったが、天使は抑揚をつけて頭（かぶり）を振った。

「その件は私の言い及ぶところではありません。…そもそも私はルクセンダルクに関する事情を、あなたにお話出来ないのです」

「それって、どういうっ?!?」

アイデアは驚愕のあまり、言葉を詰まらせた。

天使の身体が空に溶け込むように、透けてゆくのだ。

丁度、あのウロボロスがティズに化した際、放っていた邪光によく似ている。

「…! 時間はあまり残されていません、話せる範囲であなたの持つ疑問にお答えしましょう」

天使は真剣な眼差しでアイデアを見た。

「まず、あなたをあの世界へ導いたのは私です」

「やっぱり…あの円環はあなたの仕事だったのね」

アイデアの顔は厳しい。まともな説明もせぬまま、あんな所へ飛ばされたとあらば、い

くら寛容な人間とて納得はしまい。

ましてや、彼女には元の世界で果たさねばならぬ宿命があるのだ。

「無礼なのは、重々承知しています。しかし、あなた方…光の戦士でなければならなかったのです」

その結果、光の戦士の中で唯一動けるイデアのみが世界を越えた。

そう、天使は語る。

その話を受け、イデアは溜飲を下げた。

「はあく、まあいいや。天使様に呼ばれたのはこれが初めてじゃあないし…」

破壊神の尖兵であったエアリーに敗れた時、光の戦士たちはこの天使の力に救われたのだ。その事実を鑑みれば、感謝こそすれど憎む気持ちにはなれなかった。

天使は優しく微笑んだ。

「ありがとうございます」

「いいって、いいって…それよりさ、何で私をあの世界へ呼んだわけ？」

天使は居住まいを正し、真摯な顔でイデアに相対した。

「あの世界——ハルケギニアにとある危機が迫っているのです」

「危機？」

「どのような危機が差し迫っているのか、それは定かではありませんが、危機を招くで

あろう者を予言することはできません」

天使の顔に恐怖と嫌悪が同居した。口にするのは恐ろしく、そして穢らわしいと思っ
ているのだろう。

「その者の名はウロボロス：破壊神ウロボロスです」

「!!」

光の円環に接触してより実に何度目の驚愕であろうか。

イデアは金沙を振り乱し、猛然と反論した。

「そ、そんなわけない！ウロボロスは確かに倒したはずだよ！」

イデアの脳裡にあの決戦の情景がよぎった。

下僕のエアリーを喰らい、世界さえその触手で吸収した破壊神。無限に再生を繰り返す機関を体内に宿し、光の戦士を幾度となく絶望の淵へ追いやった。

しかし、その再生機関は不死の吸血鬼レスタール卿の犠牲によって封じられ、世界の捕食は平行世界の戦士たちの奮闘によって破られた。

再生も回復もままならぬ以上、あのウロボロスが復活することなどあり得ない。

金沙の少女の反駁を他所に、天使は頷いた。

「確かにウロボロスは光の戦士によって斃され、未来永劫、ルクセンダルクには干渉出来ません」

しかし、ルクセンダルク以外の…文化も、歴史も、風土も、概念も完全に異なる世界ならば…あるいは」

「復活の可能性がある…?」

天使は消え入りそうな声で、はいと言った。

数多の光の戦士たちを屠殺し、数億年の時を生きた不滅の破壊神。確定ではないにしろ、その理外の化物と再び剣を交えなくてはならぬのだ。

それも光の4戦士ではなく、一人の騎士として。

快活で好戦的、楽観主義のアイデアをして、この現実を前に頭を抱えずにはいられないかった。

「ウロボロスがもし復活を果たせば、ハルケギニアはルクセンダルクと運命を同じくするでしょう。当然です、彼の魔法世界にはアスタリスクのように強力な力など存在しないのですから」

しかし、と天使はアイデアの左手に視線を向けた。

鮮血に塗装された不思議な紋章。それこそ天使が望みを託す、最後の希望だった。

「使い魔。魔法使いがその生涯に渡り使役するモンスターにして相棒…ハルケギニアでウロボロスに抗う術があるとすれば、それしかありません。そして、私はそれを成し得る唯一の存在…光の戦士をその席に添えようと考えたのです」

天使が腕を振ると、イデアの左手の剣創はみるみるうちにふさがり、また血痕の肌は白磁の肌へとその姿を変えた。

ケアル。白魔法の初歩であるそれは、風の巫女が最も得意とした魔法の一つであった。

イデアは左手をかざし、今一度自身に刻まれた紋章を見た。

焼き付くような痛みと傲慢な輩の嘲笑、そしてあの桃頭との邂逅を経て不運にも獲得してしまったこの証が、あの破壊神を打倒しうる唯一の手段。

とてもそのような力を持ち合わせているとは思えないが、天使が嘘をついているとも思えない。イデアは疑念を飲み込み、天使に問うた。

「ねえ……私は使い魔としてあの子に召喚されたんだよね」

「はい、あなたには申し訳ありませんが、そうする以外に有効な手段はなかったものですよから」

「私は一生、あの子の使い魔を演じなきゃならないの？」

天使は一瞬表情を硬くしたが、次いで優しい笑みを浮かべた。

「いいえ、あなたに使い魔として活動してもらうのはハルケギニアにいる間のみです。危機が去れば、あなたは再びエタルニアの騎士としてルクセンダルクに帰ることができます」

「そう、それを聞いて安心したよ……」

次々と明かされる事実と迫り来る災難を前に意気を消沈させたアイデアだったが、漸く落ち着きを取り戻した。

だがその時だった。再び、天使の体が空と同化するように透けていくのだ。しかも、先ほどより深く、まるで石が投じられた水面のように体はその輪郭を散らせていく。

「……もう時間ですね……最早この体ではハルケギニアに干渉できないようです」

自身の無力を悔いて、また自分の不甲斐なさを恥じて、天使は歯噛みした。

望みを託せたことは幸いだったが、また光の戦士としての責務を年端のいかぬ少女に押し付け、自身はその様を世界の外から傍観しようとしている。

天使の意図した所では全くないが、結果だけみれば同じこと。平和や運命などと耳障りのよい言葉を並べ、正義感の強い少女を今まさにこの世界に縛り付けてしまった。

そして彼女を縛った荒縄は世界の安寧をもたらさぬ限り、解けることはない……

(ああ、自分の非力を呪いたくありません……しかし……)

世界を守らねばならない。それが守護天使たる己に課せられた使命なのだから。

天使は消え行く体を他所に、あることをアイデアに伝えるべきか否かを熟慮していた。

本来語ることは愚か、その言をほのめかすこと自体禁忌とされている。しかし、世界を守るため過酷な運命に身を投じた彼女の覚悟に何と少しでも報いたかった。

「天使様…体がもう…」
不安そうにこちらを見詰めるイデアを見て、天使は意志を固めた。

「イデア・リー、最後にあなたに伝えたいことがあります

あなた方と共に世界を救い、その姿を消した光の戦士…リングアベル改め、平行世界のアナゼル・ディーについて…」

「!!!」

イデアの顔が今日一番の驚愕に染まりゆく様を眺めながら、天使は己の肉体が遂に限界を越えたことを悟った。